



中国がわかるシリーズ 27 安史の乱（下）

ライフネット生命保険株式会社
代表取締役会長兼 CEO、出口 治明氏

756 年に始まった安史の乱（安禄山とその同僚、史思明による反乱。史思明もソグド系です）は、名将、郭子儀の活躍やウイグルの助け（ウイグルは唐と安史の双方を天秤に掛けていましたが、最終的には唐を選択しました）もあって、763 年に終結しましたが、節度使は、（辺境のみならず）内地にも置かれるようになり、河朔三鎮を筆頭にその自立傾向は、さらに強まりました。これ以降、唐、5 代十国を通じて、中央政府と節度使（藩鎮）の関係が政治の大きなポイントになります（なお、節度使の居所を「幕府」と呼びました）。

もともと、節度使の全てが自立を志向していた訳ではありません。唐の統制に服する順地の藩鎮も数多くあったことを忘れてはならないと思います。ともあれ、安史の乱を境に唐は分立化し、初唐（太宗、李世民の時代）や盛唐の時代とは、別の王朝のような有様に変化しました。唐の特徴であった開放性も影を潜め、内向的な傾向が強まりました。もともと、江南の農業経済の発展が、ウイグルやトウプト、河朔 3 鎮によって奪われた領土を十分に穴埋めして、唐の屋台骨を支えました。前述したインド僧、不空三蔵は、安史の乱に慄く唐室の帰依を受け、密教を大成させました。